沼尻桂一郎編輯

西南太平記

十三号

上

A438
17

沼尻経一郎編輯 全二冊

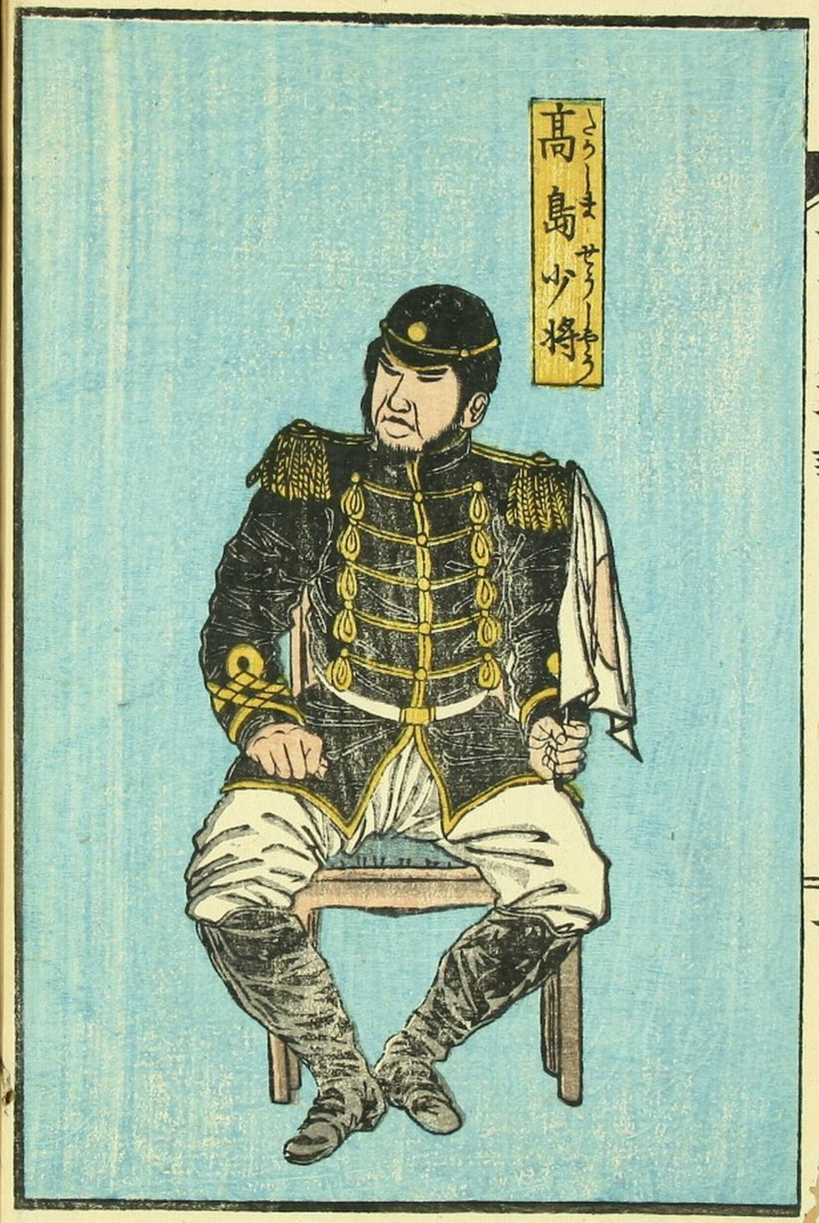
西南太平記

東京 萬笈閣發兌

48-7800

鹿兒島の暴徒と開戰せし二月二十一日より四月十五日まで死傷表として得たり是い諸口の大小繃帶所諸病院ふて治療せし者概畧ありとい

階級	傷者総員	即死	死亡	癒退	後遺
将校	三百七十八名	九十八名	六十一名	二十二名	百九十四名
下士	千百七十九名	三百六十二名	百二十一名	五十三名	七百四十四名
警部	三十八名	九名	二名	四名	二十三名
兵卒	六千五百八十一名	千四百九十四名	五百九十八名	百〇五名	四千三百八十四名
巡査	二百八十名	六十六名	二十九名	二十七名	百五十八名
軍人夫	百六十二名	四十三名	十三名	二十七名	七十九名
等級不明	百六十三名	百五十九名	四名		
合計	八千七百三十三名	二千百三十一名	八百三十八名	二百二十八名	五千五百八十六名


高島少將

樺山中佐

西南太平記
十三編上
三

西南太平記
三
官軍ハ竹田城ヲ進んげき撃す

西南太平記十三編巻之上

東京　沼尻桂一郎編輯

第廿五回

福岡の暴徒刑ふ處せられる
并兒徒大分の町へ繰り込む

鹿兒島の士民擧動ゝ注ゝ其能く我政府を奉戴ゝ終始怠らざるゝ將其復古の盛業を翼賛せる功勲を負んで他の士民ゝ異なる特典を得んと欲するゝを知らんとせゝりの既ゝ肥後の

東南ハ山岳連續して行路の艱難云ふべからず八代より薩摩ふ至る本道水股ふハ彼の三太郎峠あり赤松太郎佐敷太郎津奈木太郎との三ヶ所の嶮岨を総へたる稱ありといへ兇徒ゞ根據とする人吉の方ふハ矢部、奈須を始ドあ松球摩の山脉連絡して間道ふ至つてハ樵夫も重さを負て經過がときをりの嶮難ゑを官兵探偵を密にし逆情を得るよ至て漸その方向を定め兵

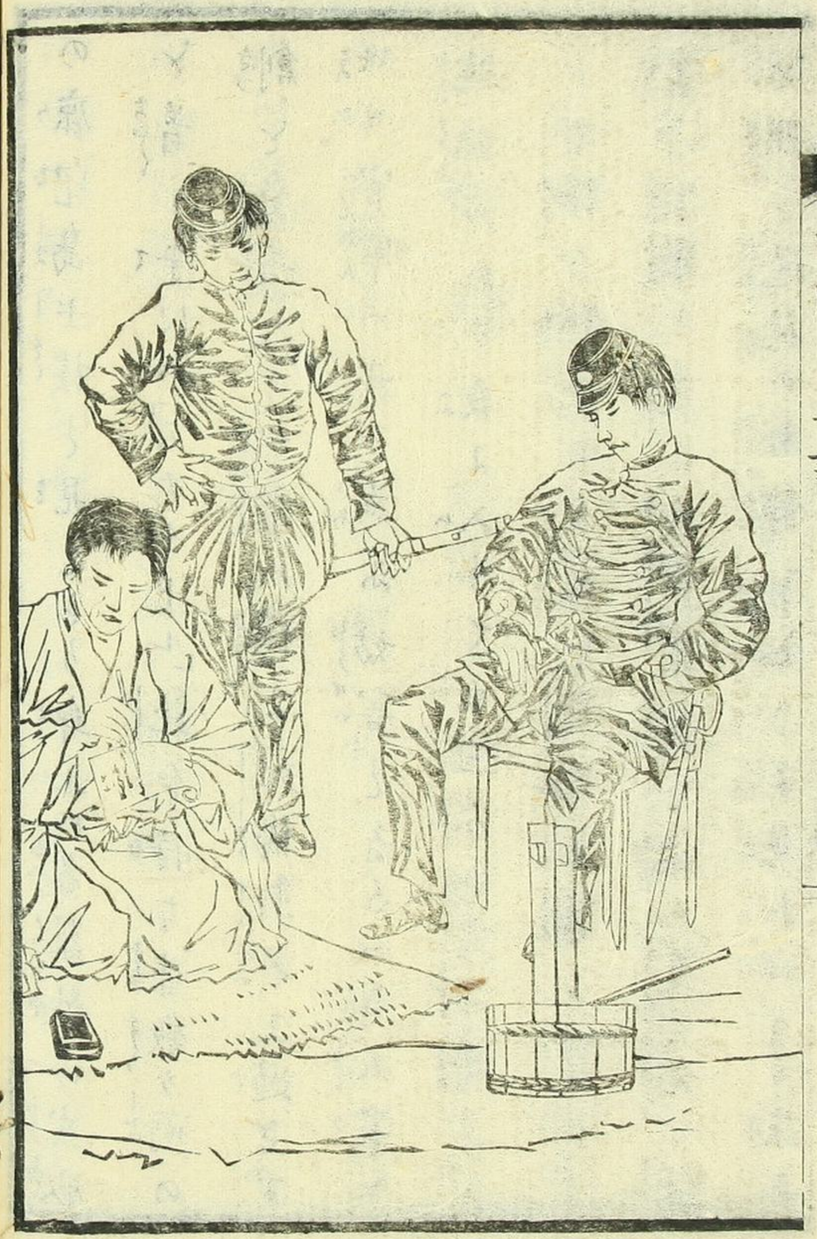
を部署して別働第三旅團ハ水股より大口へ第三旅團ハ佐敷よ別働第四旅團ハ日奈久別働第二旅團ハ下松球摩と佐敷球摩川筋服瀬通り萬江の間道等諸道並びすゝて漸次よ薩摩日向の境ふ進撃せらるゝの目的なるよ兇徒ゑ人吉よ在て要所よ砲壘を築き土民より租税を收め佐土原その他の士族郷士を募集して各所へ派遣し守備全く整ふ上ハ必ず二ヶ年

間い支ふべしなどと廣言を吐きしとぞ

五月七日の未明より鹿兒島の逆徒等れ凡そ二百人計り天保山の邊より甲突川の下流を渡り官軍を襲撃んとす此の下流い海へ注ぐ口ふて川幅尤も廣く六十間計りもありて前日の雨ふて水嵩大より増したり此両岸ふ六七尺餘もある石堤ふて沖の村の岸ふい官軍一面ふ砲壘を築きて固守したり然れを官軍い逆徒

の来る我知ると雖ども態と發砲せずして物ふ大小砲を構へ狙ひを定め思儘ふ引寄て一齊ふ打破らんと静り返て待ち掛たるふ逆徒を夫とも知らず各颯と計りに川へ飛入り既ふして中流まで進来るを官軍い仕濟したりと大小砲を一齊ふして放ちたるを其の場ふ將碁倒しに打ふきれ残る逆徒い向ふ岸へ遁登るもあり此方へ進を来るもなほど或い傷を負ひ或い

殺されしが其中十人計りハ遂ニ石崖の下まで押寄必死となりて砲戰したれど斷崖數尺恰も屏風を立たるが如くなるを容易ニ登り得ると難く加るニ官軍の打出す銃丸ハ雨の如くして終ニ十人共其場ニ斃れたり其餘の逆徒ハ四途路ニ分りて荒田村の方へ走りしが時ニ夜も全く明ぬを此の時兇徒の死骸水中に横倒れたる者現ニ二十六人あり何れも丁壯の鹿兒島士族と見えとり身ニハ各羅紗の戎服を着し手にハ「スナイドル」銃を持ち皆數ヶ所の創を受居たり官軍ハ僅ニ死傷數名ニ過ぎず此日官軍ハ我が為ニ妨害しるべき人家と焼拂たれば夜ニ入りても三方の火焔熾んニして恰も烈火の台場と周圍ニ築きたる如し蓋し官軍が重ニ夜中家屋を焼ハ其火光の道を照し逆徒の動靜を知るニ足れば茲ニ



福岡の暴徒各辞世を詠ト刑に就く

黒田参議い今般軍功あり〻同八日玄武丸ふて着港ふ付東伏見宮岩倉公大木参議を始ドわ出迎ひありて同日午後五時ごろ汽車ふ〻新橋停車場へ着せらるゝふ同所ふい主上の御召馬車其他馬車二輌を宮内省より廻され巡査い数百人同所より新橋の間を警衛し黒田参議い主上御召の馬車に岩倉公と御同乗りふて直ふ太政官ふ出頭せし此日目出度帰京ありし萬歳を唱へたり又福岡の暴徒鎮定の御處分い五月一日ふ相濟たるゞ其巨魁等斬罪ふ處せられし時刑場ふ臨えて詠ドたる辞世左の如し

「咲て散る花は例しふるよ身い
　　越智彦四郎
　　のがれかねとの實と浩ぶら斧」

「あゝ嬉しさ後の月の霽く　同人
　　死出の山路もふ迷ふ」

「そしん人をふらんかいへ天地る　久光忍太郎

恥ぬまろい神ぞ知るらん」　同　入

「冨士の岸いかくあるものこしかりるる

こうもしこの逢ぬ母のこひしき」

「あどありと人あこかめぞ山桜　村上彦十

散うての後のあらきこて弱枝」

「咲をも散るる花なり今さらに　加藤堅武

うき世を言ひ菓子なし」

「盡すなどつきぬ心い死をなわ　同　人

うき世我志のぶ種とありまん」

「此春いよよ吹風のさとがしく　同　人

つがをるぐるの恥も散るかな」

時よ斬罪右の四人又十年以下の懲役六十人

餘無罪二十二人ありしと又同十日前より追々

官兵と党徒が抗戦とありしより最初官兵が

恥不利なるよ乗ドて屢襲ひ来りしが官軍わ

能く防ぎ戦つて一時退縮せし戦線を廻復し愈進んで大関山掃部越を始めとして嶮山且は構へ砲壘を數百所下せども只今の筈瀬色の逆徒等も支へがたきを察して陣所を焼て退くべき景況なり曩に二千の兵を擁して鹿児島の城下に迫りし野勢の縣下に聞ゆる撃剣家あて貴島の隊に在りしるゞ官兵の守禦整いざる間に我一拳して攻下さんと

不意に寄せたる甲斐もなく散々に討ぬやまされ元柿本寺の裏三軒松を越えて且戦ひ且走りしも此處彼處に討死しより再度大拳せず愈々逆勢挫折たりまゝ鹿児島に駐在せる官軍に哨兵を四方に配布り甲突川の中に竹柵を結び渡して逆徒の破りて超る者に渡しも果ず砲撃せんと晝夜の防禦の油断なきを去る十日以前とやら月無き夜半の武橋より川瀬を傳ひて竹柵の邊間近

忍びより又物を以て結つら祐し柵の縄をば切解い
定て逆徒でざんゐれと待設けたる番兵ゞ透さず
發せる銃先ふアッと魂切る女の聲ふ如何ゐる者
ぞと近寄て死骸を撿れば思ひきや年まゞ若き
一個の婦人の背中ふ幼稚兒を負たるゞ母子とも
急所を撃拔れて川瀬ふ倒れ伏たるにぞ兵士ハ眼
と目を見合せ若や此頃城下ゑ寄し逆徒の者の
妻ふして夫ゞ討死ゐしたると。無念ふ思ひ及ぢね

迚も一ト太刀恨こん心ゐりしゐ母子諸共弾ふ中り
て死居たる樣ハ玉瘢を負ひ紅ゐるの如く血ふ染く
死たるゐ〜んゝ是等ハ逆徒の妻ふして最憫然の事
ふて見る者覚えず涙と催すゑ至わり逆兵の依托
によりて柵と破り防禦の有無とべ試て襲来らん拙
策も此一撃ふ望をたちて再度寄せぬゐるゐ
疑念ハ晴ざりしと又熊本の逆將ふて池邊吉十郎
ハ悔悟して自首したりとの説もありしゞ聞く所ゑ

女黨甲突川ハ横死する

よりとび大いに違へり元、池邊い赤穂口黨の長として
數多の士族鄕士と共ふ屢々官軍と戰ひ當時西鄕
大將と同じく人吉ふ在るを旧知事細川氏い大ふ
憂へられ兵器を捧げて軍門ふ降伏せば細川護
久が一命ふ換ても諸士の為ふ寛大の御沙汰を願
うんと曾舊藩士の逆徒たるを悲ミ懇ろる說諭書
を取持せ腹心の家令ふ命じて戰地ふ赴かしめ兇
徒ふ此使ふ立しも人ふ知られたる者るをべ漸ふ

して人吉に達し其趣を演說せしふ池邊吉十郎い
旧知事公の恩誼の厚きを拜謝して斯身ふ餘る御
懇諭なれば降伏致す筈なるをども一旦同意致せし
上い今ふ至りて變じがたしと彼諺ふ毒を喰ば皿迄
もとふ返答なれば使者い望を失ひて此頃帰り來
りし。且護久公も當時の身分ふ候得ば此上强て說
諭の權ふなく種々と盡力るせしと又熊本縣の
士族の中兼々實学派し唱へられたるい神風連の

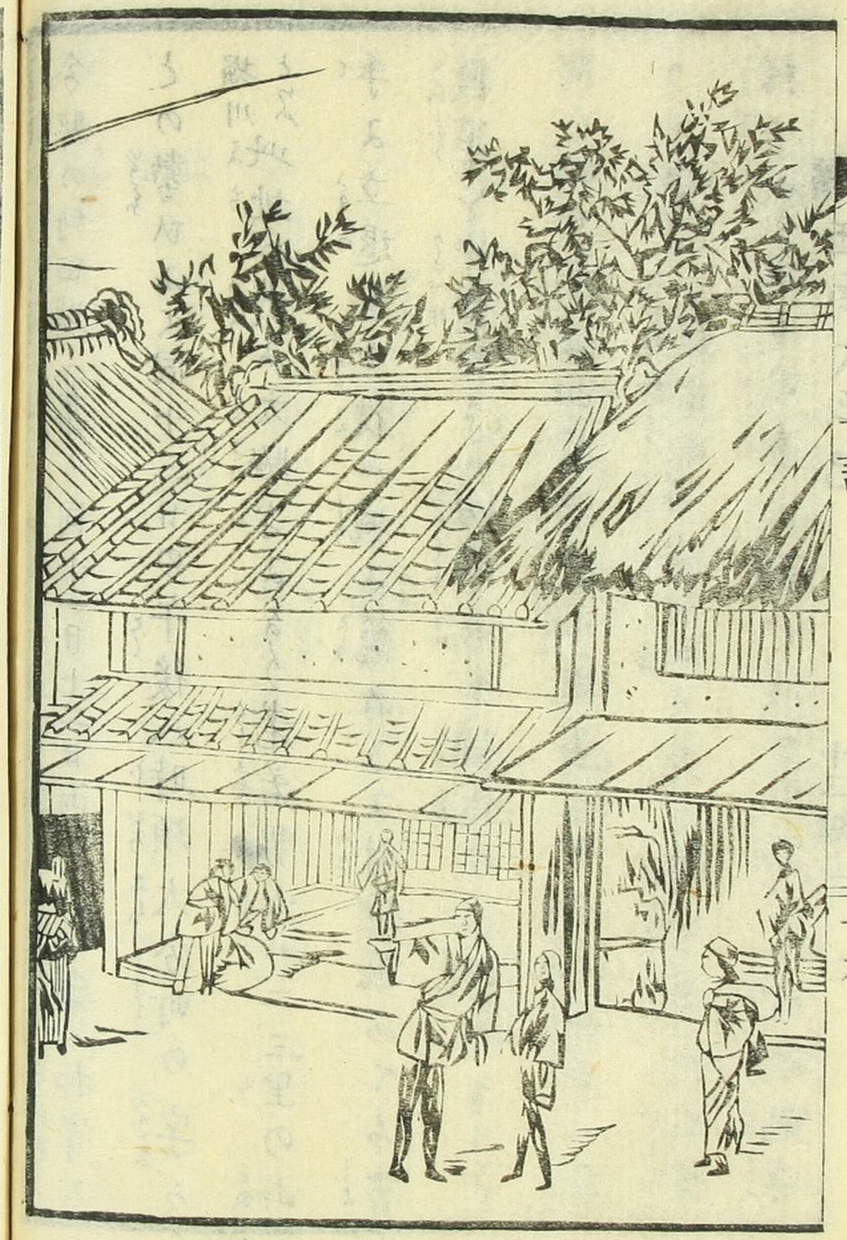
暴動ふも関係せず此度の騒擾ふも傍觀して敢て
大義名分を誤らざる故ろ兇徒ふ與したる者ハ甚
だく是を憎こ逆威をかりて私の怨と散ぜんとす
るゞ如き所業とるゝ是ゞ為ふ流離困難せゝ人
少からざりし彼池辺吉十郎の黨ハ實学派の者
の家族迫も種々困難せしめたりと
說云有名の太田黒惟信舊長崎縣令宮川房
之ゞ其家族の立退く先迫も或ハ破毀し或ハ
放火しゝど屢困めし上老幼婦女と殺害せん
とせゝしさへも有るゝ逆將桐野利秋ゞ聞て大
ゝ其暴を怒りて嚴に制したるより實学派の
人の家族ハ危難と遁れし者多ろるべしとゝ
亦云實学派の中ゝ同縣士族馬淵次郎とゝ人
ハ二三年前より屠牛の商法を開きて籠城前
より手續ふて城中へ牛肉を納め居たるゞ

其後逆徒ども縣下へ乱入し此様子と見て定めて城中へ内通するものゝうたがひあり縛せられて逆徒陣営へ拘引れ厳重に糺問されたりと商業一途よりして更に餘事に関係なきはと漸く危きを遁れ其後逆徒陣営へ牛肉を送り又馬肉と取交たりと此馬淵は早く開化に赴きし人物なりとか

借も兇徒ども大分縣下へ襲ひ来り五月十日頃より大分縣の竹田城へ集り同十一日十二日両日は縣廳へ押寄るとの勢ひあて同十三日の午後八時頃大分町の字を堀川此地は俄に大騒ぎなり老若男女は二三里の山手へ立退き兇徒は城に籠れるに付縣廳にては書類等を片付たるに海軍兵も繰込の手筈にありて

同十六日午後四時頃東京巡査二百名野津原へ来りて是は大分縣廳より三里熊本街道番兵を配りたる縣官并に石井權少警視も巡査を引て同日午後十一時過鶴崎

俄ゝ大分の町動拳そ



み着し同所に泊りたるを暴徒の小勢を以て襲来り其夜開戦となり互に必死の激戦なるとゞ双方死傷多く此所彼處に防戦すること千変萬化み黒烟の隙を潛りて戦ふに巡査四人の即死せし手負四人あるとゞ暴徒の死傷の数を詳ずず又戦地みて官軍死傷の名の知れたるを記載せる左の如し

陸軍大尉大迫尚克　同佐々木昌武
同伊達一民　同彦坂為一
同武廣遜　同五藤正誼
同井関千假　同永田由謨
同曾原忠一　陸軍中尉津崎繁次
同外崎敬武　同小野好義
同高坂知次　同大谷利章
同石黒重耀　同小島利征
同皆川由義　同森周貞
陸軍少尉白石弘人　同岡崎忠良
同片山殷俊　同野上十郎
同林如光　同山本居周

佐藤安吉　鎌塚清吉　高橋次平
山田慶太郎　本山伊太夫　前田岩楠
西川亀吉　大橋平吉　歌倉彦蔵
中安五郎　大黒彌平　以上

又同十七日ハ三等萩原大警部ガ巡査三百人徴募巡査千二百人ヲ引連玄龍丸ト名護屋丸トニ乗リ組ヒ鹿児嶋ヘ向ケ出帆セラレシトハ此程総督宮ヨリ鹿児島縣ヘ布達ハ

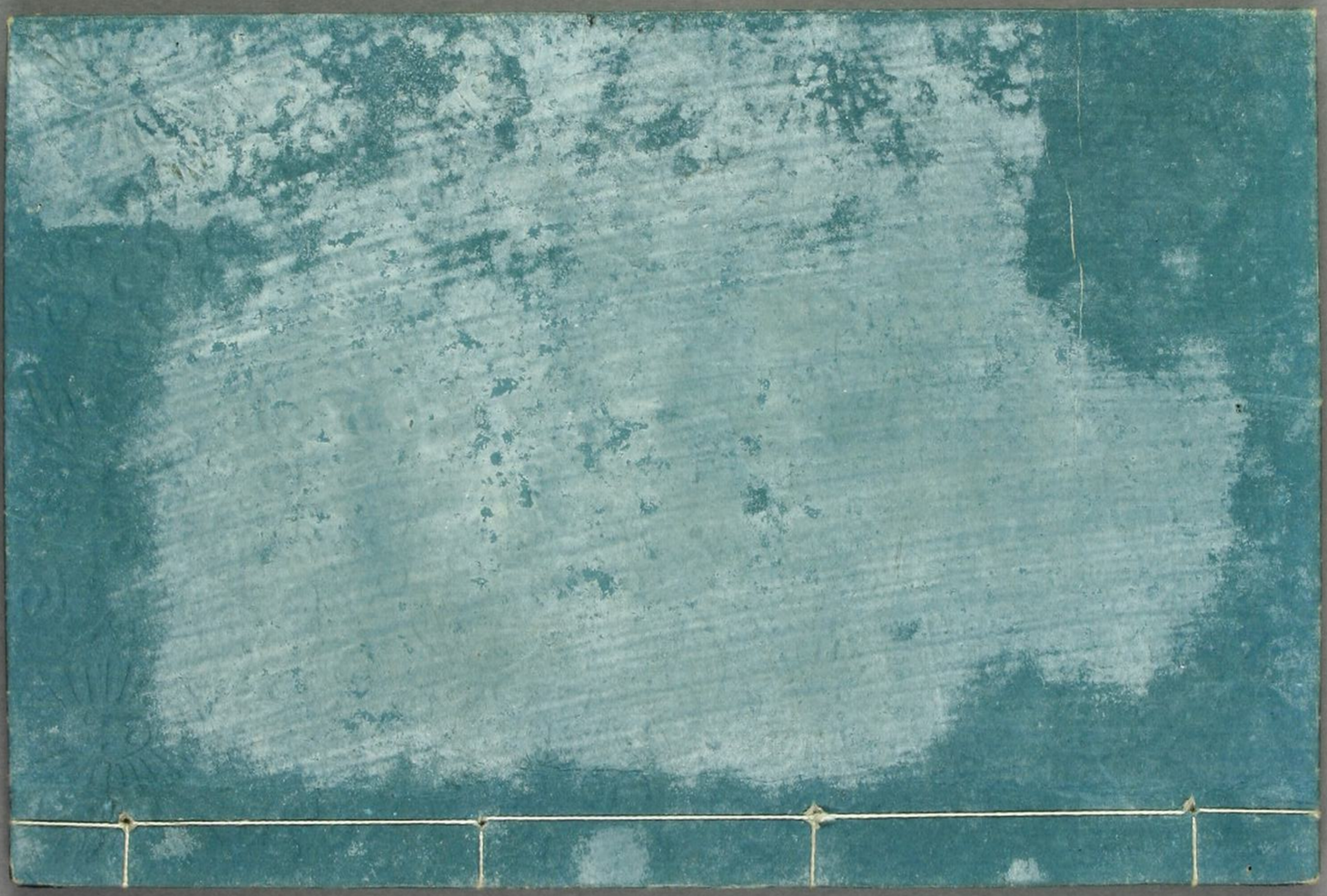
其縣下嘯集ノ暴徒曩ニ熊本ヨリ乱入以来縣下ノ人心穏ナラズ追々党徒ハ懲ヒ終ニ非命ノ死ニ就ク者少カラズ　天皇深ク之ヲ憂慮シ給ヒ親シク反正帰順ノ道ヲ聞レンガ為勅使ヲ差立ラレ候處彼等毫モ之ヲ悟ラズ彌暴威ヲ逞フセントヲ欲スト雖モ遂ニ挫折シテ今日ノ敗衄ニ及ブ此ニ於テ熊本縣下ヲ去リ日州ヲ経テ其縣下ニ帰リ再ビ良民ヲ害スルノ憂ヒアランモ計リ難キニ付今般更ニ陸海軍ノ兵員ヲ派遣シ以テ人民ノ安

同江田國通　同門田正壽
同原田庵　同滿山順
同加藤三郎　同村本以政
同三野山敏光　同矢野茂
少尉補吉田總吉　同井手利見
其他鎮臺と近衛軍曹伍長兵卒ふて南の関西山の上へ埋たると記す
菊地伊七　松尾米三郎　藤茂
堤藤吉　田添又雄　伊藤壽三
安藤仙重郎　奥田知學　笹井嘉七

大河原多吉　塲谷内寅　松浦寅吉
佐山勝衛　前田米吉　正田栄三郎
田中三郎　多賀猛輔　原田清作
吉田半右衛門　原田牛太郎　望月金次郎
田中捨次郎　田中平太郎　森本千代吉
高橋藤七　山田德二郎　菅義高
荒谷多久平　荒木豊吉　岡田銕藏
多久嶋喜一郎　北猪之丞　中山富藏
大森亀太郎　中井音吉　鍋倉嘉一
松島正春　江川常太郎　谷常吉

寧ろ保護ー正路ふ帰せしむる御趣意ハ候條
一般の人民疑念なく各職業を営ミ決ーて動揺
せざる様至急管下へ漏なく諭達可致候事

明治十年四月廿三日

西南太平記十三編巻之上終

010190507748